九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Cairn : 40年前の思い出

朱雀, 成子
佐賀大学文化教育学部 : 教授

https://doi.org/10.15017/6792847

出版情報：九大英文学. 50, pp.481-482, 2008-03-31. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

Cairn —40年前の思い出

朱雀　成子

大学3年の頃は、高校の先生になろうか、それとも大学院に行って英文学への道を志ざそうかと迷っていた。1960年代は、文学部や薬学部などで男子学生よりも女子学生の比率が高くなり、大学を卒業しても女性は家庭に入ってしまうから税金の無駄使いだとする「女子学生亡国論」がメディアを賑わす頃であった。「女子学生亡国論」には憤慨しつつ、一方で大学院に行くことには、それなりの覚悟がいると思っていた。「女性研究者」になることへの茫漠とした不安が心のなかにあったと思う。当時は第2波フェミニズムがアメリカから入ってくる直前でダブルスタンダードが当たり前の時代であり、学問の世界もやはり男性中心であった。

大学院に進学し、*Cairn*（『九大英文学』の旧称）にお世話になったのは昭和43年（1968年）である。*Cairn* 12号の私の論文のタイトルは、「ハムレットと漱石の『行人』の一郎との類似」である。これは学部の卒論に選んだ『ハムレット』を比較文学的なアプローチで考えたものである。今思うと、この *Cairn* への投稿が、私の研究者としての出発点だったことになる。

院ではじっくりとシェイクスピアを読みたかったのだが、現実にはそれは叶わなかった。院に入学してまもなく6月2日に、板付基地(現在の福岡空港)に着陸失敗した米軍戦闘機F-4ファントムが、当時竣工中の九大大型電算センターに墜落炎上し、それを機に学内の学生運動に火が付き、デモや集会の毎日となった。文系の建物が封鎖されたため長期間授業はなく、学外の授業が1～2回あったように思う。このままでは皆一

緒に留年するかもしれないという状況であったが、最終的には修了の運びとなった。

学究的な環境とは言い難い２年間ではあったが、40年たった今も、あの頃ご指導くださった先生方の雰囲気が鮮やかに蘇ってくる。峻厳で聞こえた英文学の前川俊一先生は、私たちの頃には温厚な感じを漂わせられつつあった。アメリカ文学の元田脩一先生は精力的な授業をなさっておられたし、新しく赴任された英語学の大江三郎先生も新風を吹き込んでくださっていた。

院生の頃は「激動」の時代であった。２０代半ばの私は多種多様な経験をし、楽しい充実した時間を過ごしたと今は懐かしく思う。